

深イ〜話!

No.56

「人はみな平等」 — PHP「生きる」24年5月号 —

いまから66年前の昭和20年、太平洋戦争が終わった年の秋、七歳だった私は、疎開先の瀬戸内海の小島から兵庫県の芦屋市にある母の実家へ引き揚げてきました。父が原爆被爆後の広島へ救助活動に行き、疎開先で命を落とし、母は私を含めて四人の子どもを連れて引き揚げる船賃に全財産をはたいたために、一家は食うや食わずの有り様でした。

がまんの限界を超える大事件

芦屋へ着いた翌日、私は祖母に連れられて、地元の小学校へ行って二年に編入しました。しかし、粗末な服で靴もなくてゴム草履姿で、真っ黒に日焼けした顔で四国の方言しか話せなかった私は、全校生徒の好奇心を刺激したのか、激しいいじめの対象になってしまったのでした。毎日毎日、私はたくさんの子どもに取り囲まれて、「ばいきん」「さる」「死ね」などという言葉に浴びせられ、小突かれたり蹴られたり、砂や石を投げつけられたりもしました。

しかし、私はじっと耐えていました。母に言うと、母が悲しむと思ったからです。

母は四人の子を食べさせるために、一番電車で神戸へ行ってケーキを仕入れ、それを大阪へ運んで売る、いわゆる「^{かつぎや}担ぎ屋」をはじめていました。

子供の目から見ても過剰な労働にやっと耐えている母に、どうしてもそんな話はできませんでした。まして小さな弟や妹にそんな惨めな兄の顔を見せるわけにはいきません。私は、毎日近くの小川で汚れた手足や服や自分の泣き顔を洗って、平気な顔で帰ることにしていました。

しかし、ある日、とうとう私のがまんの限界を超える事件が起きてしまったのです。

学校からの帰り道、五人ほどの近所の子どもたちが待っていて、いつものとおり、私をいじめにかかりました。が、その日は五年生の番長のようなKという名の子もまじっていて、いつもより激しくせまってきました。

「こら、お前。今日の給食のパンを盗んだやろう？どろぼうめ！白状せえ！」

と言って、私の首を絞めにかかったのでした。もちろん身に覚えのないことですから、私は必死に抵抗して、夢中でその五年の番長の腕に噛みついたのでした。気が付くと、そのK君が腕から真っ赤な血をばたばたと落としながら、大声で激しく泣いていました。

私は自分がしたこと重大さに震えました。もう家へは帰れないと思いました。また、この街にももういられないと思いました。そして、かばんを持ったまま国道へ出て、西へ西へと歩いたのでした。神戸の港へ出て、瀬戸内海へ行く船を見つけて、あの島へ乗せて行ってもらえないかと頼んでみよう。

いじめが突然なくなった



結局、私は空腹のため気を失って、国道で倒れ、夜遅く、パトカーでわが家へ運ばれたのでした。母はじっと私の話を聞いて、「そう、わかったわ。これからすぐにKさんの家に行こう！」きっぱり言って、私の手を引いて、大きな庭や門構えのある近所のKさんの豪邸を訪ねました。むろん私は謝罪のために連れて行かれると思い、しょんぼりついて行きました。しかし、K家の玄関でK君のお父さんに会うと、母は謝るところか、大声で、「あなたの息子さんに話があります。すぐにここへ呼んでください！」とどなり、出てきたK君にいきなり、「君はうちのこの子をどろぼうと言ったそうですが、それはほんとうですか？ なぜ、何を証拠に、この子をどろぼうと言ったのですか？ 教えてください！」と問い詰めたのです。そして、しどろもどろに、「ごめんなさい。冗談で言うたんです。」と泣き出したK君にさらに、「では、白状しろと三つも年下の子どもの首を絞めたのも、冗談だったと言うんですか？」と訊いたので、結局K君はお父さんと並んで土下座をして、私に謝ってくれました。そして驚いたことに、K君のお父さんは、「この息子が二度とこういう過ちを犯さないように、彼の髪の毛を切って坊主にします」と言って、私の目の前で、ジョキジョキとハサミでK君の髪を切ったのでした。そのうえ、K君のお父さんからの連絡で、次の日の朝礼で校長先生が、いじめを止めるように全生徒に注意してくださったので、私へのいじめもぷつぷつとなくなったのでした。

その日、私は母から、人間は貧富・年齢などとは関係なく、すべてが平等に生きる権利を持っている、ということを教えられたのです。そして、その権利を守るためには、しっかりとした認識や勇気ある言動が必要であるということも、K君のお父さんからも教えていただいたのでした。